

本学部の学生に「危機管理は何でも応用できる」と教えている。防災や事故防止や被害軽減も大事であるが、日常の生活においても、危機管理という視点でものごとを考えることは有用なのだ。

たとえば大学受験。どこの大学を受験するかはとても大切な意思決定である。親としては、それまで手塩にかけて育てた子供を手放したくないであろう。

しかし、地方から東京の大学に進学し、卒業すれば、首都圏に就職するであろうし、そこで家庭をもつことになるだろう。そして、故郷とは疎遠になりがちになる。そんな例を多く知っている。

防災の講演などで、この話をよく取り上げる。その場合、「首都圏にしか大学がないわけではない」ということにしている。自宅から通える大学に行くこともとても重要な選択だ。人生において親子でできるだ



大学受験 危機管理の視点から考えよう

ない。東京一極集中の悪影響は経済や人材流出だけではない。親子で一緒に暮らすという喜びまで壊されてきているともいえるだろう。

平成16年の新潟県中越地震では山間部が被災し、そこで生活

うにしていると思うのだ。

震災があったからといって、その復興過程で、雇用を増やすような対策をとることは重要であるが、簡単なことではない。

しかし、ここで紹介したような生活環境の変化は、災害が起こってからでは遅すぎるのである

う末永く、楽しく過ごすかという工夫についても危機管理という観点から考えることができる。今年もまた大学受験のシーズンがやってきた。

偏差値といった受験データだけで大学を選ぶのではなく、人

生いかに生きるべきかという危機管理の

け長い時間過ごすことは何よりも喜びであろう。少しでも長く親子で人生の時間を共有し、コミュニケーションすることが十分できていれば、現在問題とな

っている親の介護なども、もう少しスムーズにできるかもしれない

していた、たぐさんの住民が被災した。

週末になると、東京から帰郷し、被災地で、あとかたづけを手伝う多くの人たちを見るたびに、地方での就職機会の減少が、若者を故郷から引き離し、首都圏で生活せざるを得ないよ

る。平常時から議論しておかなければならないのだ。

新潟県中越地震では、義援金が全国から385億円も集まった。故郷を思う多くの人々が全国にいたのである。

ますます、高齢化社会に向かう現在、家族と一緒の生活をど

視点からも考えてみたらどうだろうか。このことは子供の将来だけではなく、親の将来、ひいては地域社会の安定にとっても大事なことはないかと思うのだが。

(河田恵昭・関西大学社会安全学部長)